

信州下諏訪まできていた相楽らは、
訳の分からないまま味方であるはずの官軍に捕らえられ、
一晩冷雨に晒された後、
有無を言わず偽官軍として処刑されてしまうのであった。

相楽にスポットを当てた
長谷川伸氏の著書「相楽総三とその同志」から、
凄絶な処刑の場面を抜粋する。

「・・・・・・・・最後の八人目は相楽だ、
相楽は同志の最期をじっと見つめていた。

多分、**見苦しい最期をするものがありはせぬかと、
気づかっていたのであろう、
自分の死のことなどは忘れてである。**

相楽がやがて死の座に直った、
雨はまだやまない、
相楽は、皇居を遙拝し、静かに太刀取を顧みて
「**しっかりやれよ**」といった。

太刀取は荒肝を拉がれたように動揺が出た。
再び静かに相楽が、「**見事にな**」といった。

これに災いされたか、
太刀取は相楽のうしろに廻り、
気を鎮めて一声とともに斬ったが仕損じて右の肩先へ斬り込んだ、

咄嗟に相楽が振り返り「代れ」と怒気を含んで叱りつけた、
これにたじろいてその太刀取は顔が土色になった。

代って、新しい太刀取が背後にくるまでに、
相楽の襟のあたりに、流れる血が滲み出し、悲痛な光景となった。

刑場の内も外も咳一つするものすらない。

太刀取は神気を養っていたが、
やがて、一声とともに刀をふり下ろした。

今度は見事にいって相楽の首が三尺ばかり飛んで、
雨が叩く小さな紋が数限りなく立つ地面へ、
音を立てて落ち、
泥をがばっと四方に飛ばした。・・・・・・」